



ウクライナ危機 今、祈ること

■ 中野晃一（上智大学教授 国際政治学） 松浦悟郎（ピース9の会呼びかけ人）

2022年2月24日、ロシア軍が隣国ウクライナに侵攻を開始しました。あれから3ヶ月が経ち、世界は固唾を飲んでこの出来事に注目しています。日ごと、テレビや新聞で戦況報告が報道され、NATOについて、アメリカの軍事産業について、ロシアとウクライナの歴史、ロシア正教会について、パチカンの対応について、インターネットでは大量の情報が流れています。出来事の残酷さと情報の多さに圧倒され、そして二つの国がキリスト教国同士であることに、信仰者としての足場さえ、揺らいでしまいそうです。

日本カトリック正義と平和協議会は、日本キ

リスト教協議会、平和を実現するキリスト者ネットとの共催で、オンラインの祈りの集い「ウクライナを覚えて平和を祈る キリスト者祈祷会」を連続して開催しました（第1回 3月18日、第2回 4月19日、第3回 5月6日）。以下は、第2回目の祈祷会の中で行った、中野晃一さん（上智大学教授 国際政治学）と松浦悟郎司教（ピース9の会呼びかけ人）との対談です。

私たちは、この戦争をどう考え、神に何を願うべきなのか、この対談を参考に、ご一緒に考えたいと思います。

祈り

涙と共に種を蒔く人は
喜びの歌と共に刈り入れる。
種の袋を背負い、泣きながら出て行ったひとは
束ねた穂を背負い
喜びの歌をうたいながら帰ってくる。(詩篇126)

松浦：今日は、中野晃一先生とウクライナの問題
について話し合い、少しでも皆さんの祈り
のためのヒントになればよいと思います。

私たちは、とにかくまず戦争をやめて
もらいたいと強く望んでいます。一日戦
争が長引くたびに、どれだけの人が死ん
でいくのか、どれだけの市民が、地下室
で水も食べ物もない状態に置かれてい
るのか、そう想像することに、私たちはも
う耐えられないのです。ロシアの攻撃の
あまりの残酷さ、非人道性に戦争はここ
まで人を変えてしまうのかと驚きます。

そして私たちは、そうしたロシアの行
為について、「あの人たち」と指差して、
自分たちとは違う人たちがやっているこ
とのように考えてしまいます。しかし「あ
の人たち」の誰もが私たちと同じ人間で、
家では優しいお父さん、お兄さんだっ
たはずなのです。家族の誰かが残酷に人
を殺してしまう、それは本当に驚きです。

日本でも、「殺せ」と毎日繰り返し言
われているうちに何も感じなくなってし
まったという南京大虐殺に関わった元日
本兵の方の証言を聞いたことがあります。
誰もがそうなりうる、そういう意味で、
これはまさに私たちの問題なのです。

こうした非人間化は、ウクライナの
ニュースを見る私たちにも、すでに始
まっているのではないのでしょうか。

ニュースで戦況が報道されます。どこ
を奪われ、どこを奪い返したか。新し
い武器が供給されたのでもう少し反撃で
きるな、などと考えてしまう。私たちは、

少しずつそういう報道に慣れてしまう。
でもそれは、戦場にいる一人一人が殺さ
れていくということを意味しているのだ
です。それなのに、こんなことあってはな
らないと思うことを忘れてしまう。それ
自体が非人間化の始まりではないかと思
うのです。だから、私たちの生活の中
でも周囲に無関心になっていたり、こん
なことあってはならないという怒りを忘
れたりしてしまうこと自体が、非人間化
の始まりではないかと思うのです。

ある野宿者が、こんな人たちは生きて
いてもしょうがないと言って殺されてし
まった事件がありました。あのとき、どん
な思いで私たちはあのニュースを聞いた
だろう。無関心、無感情ではなかったか。
そんな時こそ、私たちは問われるので
はないでしょうか。私たちの非人間化は、始
まっているのではないのでしょうか。その意
味で、ウクライナで起こっている残酷さは、
私たち自身の問題だと感じています。

中野先生は、もう少し具体的なところ
から、ウクライナのことをお考えかと思
いますが、どうでしょうか。

中野：私もやはり、報道に慣らされていると感
じています。正常性バイアスというので
しょうか、ある種の生存本能なんだと思
うのですが、こういう状況をノーマルな
ことと受け入れてしまう。人が殺し合い、
生活の場を破壊されている状況につい
て、ニュースなどで解説を聞いているう
ちに、生身の人間が殺され、殺しあっ
ているということを、捨象してしまっ
ていると感じます。ニュースの人間性を取
り去った戦況報告には気をつけないと、実
際に人の生き死にかかっているとい
うこと、どれだけの苦しみがそこにある
かということのを忘れ、夢中になって見
てしまうことになる。そうやって戦争のロ
ジックに取り込まれてしまう。恐ろしい

ことだと思います。ですから、今はとに
かく、正気を保つ努力が必要なのではな
いかと思っています。

しかし実際の戦場では、相手を非人間
化しないと殺すことなどできないわけ
です。先ほど松浦司教もおっしゃった日本
軍の残虐さについてですが、日本兵がと
りわけ残虐な性質を持っていたわけでは
ないのです。そうではなく、戦争のシス
テムに組み込まれ、上官や古参兵からの
暴力に慣らされ、人間性を奪われ、一人
の兵隊になっていったのです。1882年
(明治15年)に明治天皇が大日本帝国陸
海軍に下賜した『軍人勅諭』には、お前
の命は「鴻毛よりも軽し」と書いてあり
ました。自分自身が人間性を剥奪され、
そして、軍属、捕虜、地域住民、慰安婦
の方たちへと、人間性剥奪の連鎖が生じ
てしまった。これが、戦争の実態であり、
日本が経験したことだったと思います。
おそらく今ロシアでも、これに近いこと
が起きているはずですよ。

現在行われている民間人の大規模な虐
殺や性暴力などの戦争犯罪の実態は、戦
争が終わり、時間が経ってようやく全像
が明らかになっていくでしょう。殺すだ
けではないさまざまな非人間的な行いが
続いているでしょう。こうした行いに対
して、私たちも当然、憤り、悲しみ、傷
つきます。しかしこれを理解しようとし
るとき、私たちもまた、加害者を非人間
化して理解しようとするのです。つまり、
ロシア軍は悪魔だと言って、気持ちに整
理をつけようとするのです。しかし実際
には、かつての日本軍もそうだったよう
に、残虐な戦争犯罪を犯しているロシア
軍の人たちも自らの人間性に反するため
に、自らの人間性を押し殺しているはず
なのです。人を殺したり、性暴力を犯し
たりということは、自らの人間性に反す

ることですから、まず自分の人間性を殺
さないといけないわけですね。それを、
お前は人間ではないと追い討ちをかけれ
ば、それは結局、お互いが人間性を剥奪
し合うことになり、何の解決にもならな
いと思います。

極めて非人間的な極限の状況に直面し
て、我々にできることは限られています。
無力感に苛まれながら、どうやってお互
いに人間性を回復していくことができるの
かを見つめること、これが唯一、戦争を一
刻も早く終わらせる筋道ではないかと思
います。何らかの形で人間性を回復する
営みに、好循環に戻していかなければなら
ないと思います。武器を持って周りから
も加勢をして、力でとにかく圧倒すれば
いいというだけでは、決着はつかないで
しょう。

松浦：もう一つ痛感していることがあります。
戦争には反対だとみんな言うのです。で
も、戦争に反対するなら、戦争に向かっ
て歩み始めたことにもノーと言わないと
いけないのではないかと。ロシアの突然
のウクライナ侵攻に驚いた人は多いと思
います。しかし、そこには背景があっ
て、歴史的にも、両国は徐々に戦争の方向
に向かっていったはずですよ。

1989年にベルリンの壁が崩壊しました。
その時、東西の壁が壊れても南北の壁は
壊れなかった、という社説記事をどこか
で読んだのを記憶しています。西側陣営
が勝ったとされ、南北の富の差はそこか
らますます大きくなり、それが今日のあ
らゆる戦争や紛争の原因になっているの
です。本当は、東西どちらが勝ったか
ではなく、新しい世界のあり方を西側と東
側が一緒に作り出していくべきだったの
です。それが西側陣営が勝ったと言っ
てしまい、しかも南北の富の差はそこか
らますます大きくなっていったこと、それ
が、あらゆる戦争や紛争の原因になって

いるわけで、そうした中でロシアも徐々に西側に不信感を募らせていったようです。このように、戦争に至った背後にある原因を考えることは、今の私たちがいったい何をすべきか考えることにつながると思うのです。

二つの道があって、ほんの僅かに方向が違う。しかしそれが1km進み、10km進み、50km進んでいくにつれ、二つの道はどんどん離れてしまっていて、しまいには相手が見えなくなるくらい離れてしまうのです。平和を作っていく道と、戦争につながっていく道も、最初は僅かな違いであっても、いつかは完全に違う道を歩むことになってしまう。そう考えると、それなら日本はどうだったのだろうと、どうしても考えざるを得ないのです。

日本は敗戦後、憲法ができて、これからは軍隊を捨てて平和のために生きようと言った。しかしやがて、基地が置かれ、結局、初めから軍事力によって守られていたということが当たり前になってしまった。そこから、軍事化への小さな歩みが積み重なり、今、憲法を変えろ、もっと軍事力をと、平気で言うようになってしまったのだと思います。だから今こそ、本気で平和につながる道を選び取っていかねばいけないし、平和に至らない道は今からでもノーと言わなくてはならないと思います。戦争に向かって国家という大きな歯車がいったん動き出したら、それを止めることは困難です。だからまだ小さな動きの内に止めないといけないのです。しかし一体どれだけの人が、日本社会の中で、このことを自分の問題として捉えているのでしょうか。ロシアはひどいと言いながら、日本も核を共有したらいいとか、軍事費をさらに増やしたらいいと言われて、それがなんとなく認められていく雰囲気がある。戦争につながる動きを止める、しない、とい

う選択を自分の立ち位置から実際にすることが、この戦争に反対することだと痛感しています。この辺について、中野先生、いかがでしょうか。

中野：歴史を見ると、日本においても、世界においても、第一次、第二次世界大戦の後、その分岐路があって、片足ずつ突っ込んできたと思います。一方では国際連盟が不完全だったという反省を受け、国際連合によって、より国際協調に基づいて安全保障を行っていくという考え方が確立していったのですが、その一方で、軍事同盟の道、集団的自衛権の道もあったのです。軍事同盟、集団的自衛権は、仮想敵国を念頭に置いて同盟を結び、お互いを守り合い、戦争を防ぐ「抑止」という考え方です。それが第二次世界大戦を引き起こしてしまったのです。

だから第一次世界大戦も第二次世界大戦も、共に同盟同士の戦争で、人類は大きな失敗を繰り返してしまったわけです。それを乗り越えようと、国際連合や国際法の体系として、核兵器禁止条約や戦争そのものを違法化していくという、今日までの人類の歩みになっていったのです。しかしその両方がせめぎ合いながら、混在していたのです、しかし残念ながらここにきて、グローバル経済がさまざまな共同体の絆を壊して、権力やお金が特権階級に集中する状況になり、国際協調なんてまどろっこしいものは欺瞞だし、そんなことで平和は守れない、武力には武力で応じるしかない、という方向に突き進み、同盟を広げ、強化し、戦争への道に踏み出してしまいました。それは安倍政権以後の日本の歩みにも言えると思います。軍事同盟というのは、敵味方の論理ですから、先ほどの話で言えば、非人間化していく論理に他ならないわけです。この国はこんなことをするかもしれない、

自分たちが準備をしなければ相手が寝首を搔きにくるかもしれない、と際限なく不安が大きくなり、武力で安全を図ることになる。しかしそれは鏡写しで、仮想敵国の側もこちらが怖い、だから武力を止めない、ということになってしまいます。これは安全保障のジレンマで、抑止力を高めても結果的に軍拡競争が起きて、結局は全く抑止が働かなくなり崩壊してしまう。それは人類がしばしば失敗してきたことです。にもかかわらず、日本も敵基地攻撃だ、いや、敵基地どころか中核機能を攻撃する能力だ、核共有だ、と極めて危険な状況にあります。しかしこれに抗っていかないと、どこかで必ず巻き込まれてしまうでしょう。

しかも、同盟の論理というのは敵味方の関係だけではないのです。今回のウクライナのケースもそうです。ウクライナはヨーロッパ諸国の代理でロシアと戦争をしているわけです。ウクライナはNATOに入っていないので、今はNATOも参戦はしていませんが、ヨーロッパからアメリカまで巻き込んだ世界大戦が始まりかねません。実はこれと同じことが日本とアメリカの関係にもあるわけです。日本がアメリカの同盟国としてさらに武装化し、沖縄に基地を作っていけば、東アジアは安全になるのでしょうか。とりわけ基地が集中する沖縄が安全になるなんて、誰も思っていないでしょう。それはむしろ、日本がアメリカの矢面に立たされ、実際には日本には関係のない戦争をさせられかねないという危険に他なりません。テレビによく出ている安全保障の専門家たちは、同盟のメリットしか話をしますが、例えて言えば、のび太に、一番強いジャイアンと組んでいれば安心安全だと言っているようなものです。しかし実はのび太はジャイアンに殴られているのです。

アメリカはこれまで、いろんな戦争に関わってきました。ロシアが初めて国際法や国連憲章に違反した国ではありません。大国のエゴが国際協調の歩みを止め、今また大国を中心にした敵味方の論理でのぶつかり合いになってきた。真っ先に犠牲になるのは、ウクライナや台湾、日本などのような国だと思います。

やはりできるだけ早く戦争を止める他はなく、それには、武力に頼ってもダメなのです。どうやって非暴力、非武装で平和を作っていくか。そのために、国際的な大きな連帯を、市民社会の側から作っていくことが、まどろっこしいことで、これをやればすぐに解決するという方法がない中で、実は一番重要なことではないかと思っています。

松浦：ありがとうございます。最後に一言付け加えたいと思います。私たちが今、一番気をつけなくてはいけないのは、戦争という現実を前に何もできないという無力感に襲われる、そういう誘惑があるということです。でも私たちには、平和を作るのはキリストご自身であり、この世に現存して平和のために働いておられ、私たちに平和を呼びかけおられるという信仰がある。詩編126にあったように、涙を流しながら小さなタネを撒き続ければ、共に平和のために働いておられる主が、それを大きく育ててくださる。だから、どんなに小さな私たちの祈りも、ウクライナの人を思いながら流す一粒の涙も、小さなタネではあるけれども、無駄にはならず、必ずそれは平和につながるということを信じましょう。そして同時に、中野先生が話されたように、現象だけに踊らされず、その奥を見ながら、私たちの問題としていくことが大事だろうと思います。これからも平和と一緒に祈っていきましょう。ありがとうございます。